

---

# 国立魔道学校魔道犯罪対策科

羽後響

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

国立魔道学校魔道犯罪対策科

### 【Nコード】

N2208Z

### 【作者名】

羽後響

### 【あらすじ】

この時代、日本は魔道大国になっていて、他国の水準である全人口の100分の1を大きく上回り、全人口の10分の1が魔法を扱えた。

しかしそのためもあってか魔道犯罪が多発し、日本唯一の魔道師養成機関である「国立魔道学校」もその対策のため二年前から「魔道犯罪対策科」を新設していた。

主人公の「川上麻里香」はその新入生だった。

## プロローグ

現代の日本は魔道大国と呼ばれるほど魔法技術に優れ、魔法をスポーツや学問のジャンルとして捉えられられたりもするほどであった。この世界における魔法とは、おもに4つに分けられ「通常魔法」、「補助魔法」、「特殊魔法」、「黒魔法」がある。

「通常魔法」は最も魔道師にとって扱いやすく、応用が利くため、多くの魔道師が使用している。

使用用途は、武器に魔力を付与して攻撃力を上げたり、直接魔力を何かのかたちにして攻撃に使用したりする。

これの使用には、術者に合ったオーダーメイドの魔道具（たとえば剣や杖など）が必要になる。

「補助魔法」はおもに医療で使われている。

これは、おもに傷の治癒を早めるものだ。高位の使用者になると大量の魔力消費の代わりに体の欠損部分を直すこともできるが、5割ほどの確立で副作用で死に至る。

「特殊魔法」は自然の力を利用するが、遺伝性なので使用者は限られる。

たとえば、火、水、電気などを生成したり、放出したりできる。

「黒魔法」は、精神に直接何らかの影響を与えることで効果を出すらしいが、詳しいことは判明しておらず、術者はほとんどいない。

「はあ……いつまでこんな基礎ばかりやってなきゃいけないの？早く魔法を使えるようになりたいのに……」

市立第二中学校の教室で、小柄な金髪のツインテールの少女が独り言のように呟いていた。

彼女は「川上麻里香<sup>かわかみりか</sup>」。かなり活発な少女だ。

現在中学3年の冬を迎えてているのだが、魔法の授業にイマイチついていけておらず

他の教科が平均80点以上なのに、魔法だけが40点程度だった。

「大丈夫だよ、麻里香。私がついてるから。ね？」

そう言って慰めている、麻里香より背丈が大きく茶色の髪を長く伸ばしている少女は、幼馴染の「平沢可奈子<sup>ひらさわかなこ</sup>」だ。とても落ち着いた性格をしている。

この少女は「市立二中」の神童と呼ばれるほどの秀才で、成績は学年トップを最後まで守り抜いた。

二人は「国立魔道学校高等部」を志望していた。

可奈子は既に推薦入試で合格が内定していたが、麻里香は魔法の出来の悪さで不合格だった。

とは言え、実際に魔法が使用できるのは16歳以上（中学生は不可）という法律があるため、

中学で受ける魔法の授業はすべて魔法の基礎事項だけだった。

「よし！じゃ、あとちょっとやったら休憩にしよう。」

入試間近でありながら、お気楽ムードの麻里香を見て可奈子はあきれていた。

「麻里香！！まじめにやって！！そんなんじゃ一緒の高校行けなくなるよ！！」

夕日が差し込む教室いっぱいに声が響いた。

そして、入試が終わり合格発表の日を迎えた。

麻里香は親が仕事でいなかったため、可奈子と来ていた。

「麻里香・・・私のほうが緊張してきたよ・・・」

「大丈夫だって！自己採点の点数見たでしょ？全教科合計300点中243点だったじゃん。」

「そう言っても倍率例年以上で6倍だったんだよ・・・？」

「倍率なんて関係ないよ。私、できる子だもん！なんてね。」

「もう、麻里香ったら。ん？どうしたんだろ？」

突然周りにいた人たちが騒ぎ始めた。

合格者発表が始まるのだ。

「麻里香！！受験番号は！？学科は！？」

「ちょっと可奈子！？焦りすぎだよ。2331で魔道犯罪対策科でしょ。さっき言ったじゃん。」

電光掲示板に学科と合格者の受験番号が一気に掲示される。

「2331・・・2331・・・」

必死に二人は探したが、そこに2331の文字はなかった。

「うそ・・・私・・・落ちた・・・」

「ごめんね、麻里香。私の教え方が下手だったせいで・・・」

「可奈子のせいじゃないよ・・・」

二人が今にも泣き出しそうになりながら掲示板をもう一度見上げると、なんとまだ魔道犯罪対策科の合格者受験番号は出ていなかった。

「あ・・・ごめん可奈子。魔道犯罪対策科の合格者発表・・・午後だった・・・」

「バカバカバカバカ!!」

「いやーすっかりしててさ!ごめん!後で何かおごるからさ。」

「じゃあ・・・ケーキね?」

「はいはい。太っても知らないよー。」

「ねえ、麻里香?怒るよ!!」

この後、ケーキ屋によりつつ家に戻ると母の「川上真理子<sup>かわかみまりこ</sup>」が仕事

から帰ってきていた。どうやら午後からだということを知っていたのは彼女だけだった。

「おかえり、2人とも。合格発表直前に遊びに行くなんて余裕だね。」

「お母さん!! 午後からだって知ってたなら何で言ってくれなかったの!? 朝から制服着てたじゃん!!」

「だって、名残り惜しくなってきたのかと思ってねえ。」

「割り込んで悪いんですけど、もうすぐ発表の時間ですよ、真理子さん。」

「あら! もうこんな時間!? 二人とも、行くわよ!!」

こうして、魔道犯罪対策科の合格発表を迎えた。

電光掲示板には「2331」の文字がはつきりと映し出されていた。

「や・・やった!! 受かったよ!! 可奈子!! お母さん!!」

「ほんとに・・・よかったね・・・」

「ちょっと、泣くのはやめてよ、可奈子」

「さすが私の子ね!!」

「お母さんは調子に乗らないの。もう。」

「よし、それじゃパーツといくか!!」

「お父さん！？なんているの！？」

「いやー、麻里香が母さんや父さんと一緒に学校受けたって聞いて、こないわけないだろ？」

とにかく、今日はパーティーだぞ！！可奈子ちゃんも一緒に、な？」

「はい、すみませんが一緒にさせていただきます。」

「じゃ、行きますか！！」

麻里香の声が高高く響いた。

## プロローグ（後書き）

大幅に内容変更してしまいました。

でも、前よりわかりやすい作品にできると思いますので  
どうぞよろしく願います。

## 第1話 入学！魔法の授業！事件！？

「はい！席に着いて！僕がこのクラスの担任になった高谷です。おもに特殊魔法を担当しています。それでは右の列から自己紹介をお願いします。」

「はい。私は……。」

この日、国立魔道学校は入学式を迎えていた。この学校では、高校で行う教科は一切取り扱っていない。魔法の能力をもつものは、法律により中学までで高校レベルの勉強を済ませるといふ特別措置が取られているのだ。

「はー……やっと終わったね、可奈子。」

「もう、麻里香ったら。初日からだしなんだから。」

「ところで、明日からとうとう魔法の授業が始まるね！私、わくわくすぎて眠れないかも！」

「まあ、どの科より早く実践練習とかして、夏ごろには事件の依頼をこなせるようになってないといけないんだもんね。」

「大きい事件とかは先輩方と一緒に出勤することもあるみたいだね？」

「うん。3年生までには国家認定魔道師になって世界規模で事件捜査ができるようになってないと言っから、先輩方を見て学べることよ、きっと。」

「じゃ、明日も頑張ろうね！ばいばい。」

「うん。ばいばい。」

そして次の日、いよいよ授業が始まった。

この日、初めに行ったのは魔力値検査（EからA、A A、A A A、S、S +、S Sがある。）と使用できる魔法の種類の特定だ。内容は、魔法でスキャンするだけだったのですぐに終わった。

「すごくない！？私、魔力値Cだって！！可奈子は？」

「私は<sup>ダブルエー</sup>A Aよ。」

「うっそ・・・すごくない？それ。」

「そんなことないよ？それより魔法資質はなんだったの？」

「私は通常、特殊の2種類だって。可奈子は？」

「特殊と補助よ。あなた気付いてないかもしれないけど、私たちみたいなの2種類持ちなんてほとんどいないらしいの。だから、授業は別枠で進むんだって。なんでも5月には出勤要請が入るレベルの授業らしいわ。」

「え・・・？それって、やばいんじゃないの？」

「大丈夫よ。私たち以外にも2種類持ちが2人いたの。たぶんその子たちも一緒だし、出勤は先輩か先生の同伴らしいから。」

「そつか。ん？ごめん。先生呼んでるからちよつと行ってくるね。」

呼んでいたのは、通常魔法使用者専用の武器を作る技師の「桐谷理<sup>きりたに</sup>科<sup>りか</sup>」だった。

「あなたね、2種類持ちの1年生さんっていうのは。これからあなたに合う武器を作らなきゃだから  
適合資質を検査するわ。研究室まで来てくれるかしら？」

「あ、はい。」

通常魔法使用者の適合資質検査とは、例えば魔力を集束させて放出するのに優れたものなら銃のようなもの、集束させるだけに特化していれば剣のようなもの、などという感じだ。

「一応データが出たわ。あなたは特殊魔法で電気系を、通常魔法では魔力の集束を得意とするタイプみたいなのね。なので、じゃん！こんな感じの刀になる予定なんだけど、どうかな？」

「刀・・・ですか。わかりました。お願いします。」

「うん！それじゃ、1週間後くらいでできるから期待してて待ってね！」

その後、魔法資質2種類持ち4人が班として授業を受けることとなり、自己紹介が始まった。

「えーっと・・・私が1年生の2種類持ちを指導する高上梓<sup>たかがみあずさ</sup>だよー！  
あなたたちは今日から2、3年生と同じ授業を受けてもらうのね。  
まずは自己紹介だよ。」

私は・・・つてもう名乗ったんだった。えへへへ。じゃあ君から。」

まず、背丈が小さく、活発そうな緑の短髪の少女が指名された。

「えっと、ボクは神夜崎奈々（かみやざきなな）。特殊魔法と、補助魔法を使えます。」

よろしくね。」

「よし、じゃ、次あなたね？」

次に、160センチほどのお嬢様の雰囲気、桃色の長髪の少女が指名される。

「私は、高島<sup>たかしま</sup>レイラですわ。世界で数少ない黒魔法と通常魔法が使えますの。精々私の足手まといにならないことね？」

「う・・・うん、それじゃ次。」

そして、麻里香と可奈子の自己紹介も終わり、授業が始まった。

内容はまず、魔法による飛翔の練習だ。

飛翔は魔道師にとって基本中の基本でありながら、最難関の技術だ。だが、2時間ほどで安定して飛行することができるようになる。

続いて、魔法資質それぞれの担当教諭による魔力運用の練習だ。

これができるければ実践でははつきり言って何の役にも立たない。

通常魔法であれば魔力の放出、特殊魔法は麻里香で言うところの電気の生成、補助魔法は治療系魔法の取得訓練、黒魔法は精神操作に必要な知識の取得と魔力の増強だった。

さらに、通常魔法使用者の麻里香とレイラは近接戦闘が多くなるため、魔力による加速を行う「高速機動」と呼ばれる技術の取得訓練を行う。

特殊魔法使用者の麻里香、可奈子、奈々はそれぞれ麻里香は電気、

可奈子は氷、奈々は炎と空気による遠距離射撃の練習を行う。

黒魔法使いのレイラは、黒魔法専用スキルの「魔法防御壁消滅」や「魔力剥奪」などの取得訓練を行う。

飛翔練習を午前8時半から10時半まで行い、魔力運用の練習を午前10時45分から12時45分まで、さらに昼食をはさんで午後1時半から3時半まで、個別練習は午後3時45分から7時まで行う。

最後に、教諭との試験を兼ねた戦闘訓練。

これが毎日の授業といったところだ。

そして、1週間後。

「えーっと、それぞれの現在能力を言います。1週間前にくらべてどれだけ上がったか確認してねー！」

じゃ、まずは奈々さん。魔力値B、飛行性能C、遠距離射撃性能S、補助魔法レベルC。

次は、麻里香さん。魔力値B、飛行性能B、近接戦闘性能B、遠距離射撃性能C。

で、えっと、レイラさん。魔力値A、飛行性能C、近接戦闘性能B、黒魔法レベルS。

最後に、可奈子さん。魔力値S、飛行性能S、遠距離射撃性能A、補助魔法レベルS。

以上です。

あ、あと麻里香さんとレイラさんは武器できてるらしいから、研究室行ってもらってきてね。」

「ねえー、一緒に行こうよレイラ？」

「なんで私があなたごとときと一緒に行動をしなくてはならないの？」

「目的地一緒でしょ？ね、行こうよ。」

「もう・・・わかりましたわ。」

そう言うて二人は研究室へ向かっていった。

「ねえ、可奈子ちゃん？あの2人何気いいコンビじゃない？」

「そうだね。私と奈々も負けてられないね？」

「うん！」

---

ここは研究室だ。

桐谷が、2つの武器の最終調整を行っていた。

片方は刀、もう片方は短剣が備え付けてある弓だ。

すると、コンコンと研究室のドアをたたく音が聞こえる。

「むふふ・・・ようやく来ましたか・・・」

桐谷が妙な笑みを浮かべる。恐らく、会心の出来に舞い上がる心を抑えられないのだろう。

「失礼します。」

「失礼しますわ。」

麻里香とレイラが入ってきたのを確認すると、一目散に二人の元へ走り去っていく。

「でーきーたーわよ！！」

さながらお化け屋敷にいるような形相で近づいてくる桐谷をあつさり2人はあしらい、武器の話を始める。

「私たち、武器を受け取りに来たんですが・・・」

「あ、うん。できてるよ！2人に能力にばっちりあつてるはずだよ！」

2人に武器を手渡す。

「これが私の武器かあ！刀とか超かっこいいじゃん！！レイラのは？」

「私のはこの弓と短剣ですわ。近接、遠距離両用の武器ですわね。矢は？」

「ふふん。この武器の矢は魔力で生成するの。そうすることであなたの黒魔道の固有スキルを発動できるようになっているから。」

すると、突然放送が鳴り響く。

「ピーピーピー。エマージェンシー！！エマージェンシー！！近隣の村で魔道殺人事件発生！！

直ちに出勤できるものは出勤の準備を！！」

「困ったわね・・・今2、3年生が事件で出払っているのに・・・」

「麻里香！」

「レイラ！」

可奈子が奈々を連れて研究室に飛び込んきて言う。

「私たち以外、ともに戦える人がいないみたいなの。」

「4人で行くよ！！桐谷先生！！出勤許可の取得と転送の準備をお願いします！！

といった麻里香の目と、ほかの3人の目を見て桐谷は決心した。

「わかったわ！！管轄！！聞こえるかしら？桐谷です。出勤できる1年生が4名、座標の特定を。

・・・わかったわ！」

「先生！」

「出勤許可が下りたわ！私も行くわよ。」

桐谷の足元に魔法陣が展開される。

「転送！！！」

## 第2話 歌う魔道師

緑があふれ、農業の盛んな村は、ほんの一瞬で血の海と化していた。

村のあらゆるところに遺体が転がっている。

その中で、今まさに70歳代であろうこの村の村長と若い役場職員3人が魔道犯罪者2人と対峙していた。

「くっ・・・村長・・・あんただけでも逃げるんだ・・・こんなやつらに勝てるわけがねえ・・・」

「わしだけ逃げるわけにもいくまい。わしは最後まで戦う！行くぞ我が極意！！炎龍召喚！！」

すると、ゴオッと音を立てて地面から大量の炎が湧き出してくる。その炎が徐々に龍のような形に変わっていき、敵2人に襲いかかる。

しかし、敵2人は軽い身のこなしでいとも簡単に避けきった。

「おお！死にぞこないの爺さんがまだやる気ってか！」

斧型の武器を持った男が高速で村長に接近する。

「じゃ、あばよ！！」

バキン！！

鈍い音があたりに鳴り響く。

「なんだよ・・・！てめえら！！」

そこには、麻里香とレイラがいて、斧による攻撃をそれぞれ刀と短

剣でぎりぎり防いでいた。その間に職員と村長を桐谷が転送魔法で学校へ転送していた。

「くっ・・・!!」

一旦、斧の男が下がって間合いを取る。

麻里香が言う。

「私たちは、あなたたちを逮捕しに来ました。おとなしく抵抗をやめて武装を解きなさい。」

「おいおい！？あんたらみたいなガキなんか捕まるほどへボい魔道師じゃねえんだよ!!」

男がまた高速で接近してくる。

しかし、麻里香がひらりとかわすと、後ろではすでに奈々が魔法の準備を終わらせていた。

「へへっ！一瞬で消し炭にしてやるんだもん！行くよ!!」

奈々の周りには無数の炎の塊ができている。

「ブレイズ・スマッシャー!!!」

指をピンつと鳴らすと、その無数の炎の塊が高速で男に襲いかかってゆく。

「くそっ!!避けきれねー!!」

ズドン!という爆発音とともに男は炎に包まれた。

「あれっ・・・やりすぎちゃったかな?」

煙が消える。

だがそこには3人目の男が突然現れ、黒い光の障壁を作って炎を防いでいた。

「・・・たかがガキ相手にみじめな姿さらしやがって・・・！！さっさとぶっ殺して帰んぞ。」

さっきまでいた2人の男に比べても明らかに異様な雰囲気を醸し出していた。

「まずい・・・！なんかあいつやばそうだよ！？もう一発ぶち込んでやる！」

奈々が、男の雰囲気いち早く気付き再度魔法陣を展開する。

しかし、男は銃型の武器を取り出し、発砲。

奈々の腕に直撃した。

「うぐっ・・・」

痛みあまり、奈々は気絶した。

「奈々！！」

4人が駆け寄る。怪我はひどくはないが、このままでは戦えないと判断し、

桐谷が素早く転送魔法で学校へ転送した。

「あっはは！！まずは1人だ・・・次はどいつにすっかな？ん！？」

麻里香と可奈子が突然逃げるように飛び立った。

それに驚いた男は、残りの2人に追うように命令し、自らは桐谷とレイラと対峙する。

「おう、あんた教師なんだろ？どんな教育してんだよ？仲間置いて逃げ出すとは……」

男の言葉をさえぎるように桐谷が話し始める。

「あんたこそどんな頭してんのよ？作戦に気がつかないなんて相当ね？」

「作戦……だと……？」

桐谷のいう作戦とは、あえて逃げるふりをして敵を分散させこちら側にとって有利な状況を作り出すという、集団戦法の基本中の基本だ。その指示を出したのは奈々を転送した直後だった。

「いい度胸してんじゃねーか！！いいぜ！！2対1だろうが何だろうがかまやしねえ！」

そして、戦いが始まった。

「可奈子？そろそろ十分に引き付けたんじゃない？」

「いいえ。目標地点まであと3キロあるわ。」

「そつか・・・2人とも大丈夫かな？」

「桐谷先生もいるんだから、きっと・・・」

そんなことを話しているうちに目標地点にたどり着く。

「やるよ、可奈子！」

「ええ。すぐに片づけてあっちに加勢しよう。」

麻里香は刀を鞘から抜き、可奈子は補助魔法の1つ「魔力増強」を麻里香に使用する。

こういった魔法を使用する際、術者は魔力を放出し続けなければならない。

敵も片方は斧を構え、もう片方が補助魔法「筋力増強」を使用する。

「それじゃ、行くよ！！」

とてつもないスピードで、互いが接近し、武器が触れ合う。

ガキン！バキッ！っという音が響く。

「はああ！！」

「どりゃー!!」

ガチッとそれぞれの動きが止まった。  
互いの武器がぶつかり合いながら震え、そのままどちらにも動かない。

「くっっ・・・」

「んんん!!!」

さすがに相手が男ということもあるのだろう。  
力の均衡を破ったのは斧の男だった。

「きゃあ!!!」

とてつもない力に押し切られ、思い切り吹き飛ばされた。

「へへっ!!次は、そっちのお嬢ちゃんだ!!」

可奈子に接近する。

だが、可奈子は補助魔法を解除し、攻撃魔法に転換し始める。

「な・・・なんだこいつ!?まさか、魔法資質2つ持ちだつてのか  
!?!」

「そういうこと。残念でした・・・」

可奈子が利き腕の左腕を前に出すと、魔法陣が現れ、冷気が一点に  
集束される。

それが可奈子の身長ほどの大きさの円形の水色のエネルギー球にな  
る。

「凍り付きなさい・・・キューレ・シュツルム!!」

放たれたエネルギー波はドオオ!!!という音とともに斧の男に直撃、

男はそのまままっさかさまに  
地面に落ちてゆく。

「危ない!!」

可奈子が声を上げると、高速で何かがその男を地面すれすれでキャ  
ッチしている。

「え・・・？誰？って麻里香！？無事だったんだ！！よかった・・・」

「当然でしょ？それより、もう片方も片づけるよ！」

そして、補助魔法しか使えないもう1人の男もあっけなく逮捕し、  
学校へ転送。

学生が逮捕した場合は、学校の犯罪者転送用転送エリアへ転送し、  
警察へ身柄を明け渡すのが基本だ。

しかし、相手が凶悪な犯罪者であると認定された場合にのみ、昏倒  
状態になると現れる魔力核を破壊し、魔法を使用不可能にした上で  
ないと転送はできない。

「ふう。転送完了。あとは、あっちに加勢しないとだね。それより  
麻里香・・・怪我大丈夫なの？」

「問題ないよ!!さ、行こう！」

その後、麻里香と可奈子が先ほど戦闘を行っていた場所へたどり着く。

「ま・・・麻里香・・・大変だよ！早くいかないと！！」

「どうしたの？そんなに焦って？」

「2人が危ないの・・・」

「え・・・？やばいほんとだ！！行くよ！！」

状況は最悪だった。

桐谷、レイラの2人は血が流して倒れている。

その上、あの男はまったくの無傷だった。

「あーあ・・・でかい口たたくからもつとできると思ったんだけど  
な・・・

もういいや、死んじまえよ。」

男が銃口を2人に向け、魔法陣を展開する。

「シュバルツ・ドンナー！！」

男に黒い雷が命中する。麻里香の魔法だ。

「ぐあああああああ！！！！」

男が倒れる。

そのすきに、2人の元へ駆け寄る。

「大丈夫！？レイラ！！桐谷先生！！」

麻里香の声が通じたのだろうか。2人が目を覚ます。

「くっ・・・麻里香さん。不覚ですわ・・・あの男、魔力による銃撃しかできないのに・・・」

異常なほど強かったですわ・・・」

「麻里香ちゃん・・・私・・・先生失格だね・・・生徒の一人も守れないなんて・・・」

レイラさんを連れて逃げなさい・・・こいつとは戦ってはいけないわ・・・！！麻里香さん！後ろ！！」

「！！」

とつさに刀ではじき返す。

「おい・・・そっちの2人よりできそうなやつが来たじゃねーか！？少しは楽しませてくれよ！」

男が魔法陣を展開する。

「麻里香さん！！逃げて！！連射型の魔法が来るわ！！」

「こっちだつて！！」

麻里香も魔法陣を展開する。

麻里香の周りに球体の電撃魔法が発生する。

「死にやがれ！！フェアニヒテン・トイフェル！！」

一気に大量の魔力弾が打ち出される。しかも、それがしばらく打ち出され続けるのがこの魔法の特徴だ。

「ウン・エントリヒ・ドンナー!!」

麻里香の魔法も大量の電撃が放出されるが、すべて打ち終わっても、男の魔法はまだ続き、防御魔法で少しは防げたものの、3分の2は被弾した。

「くう・・・だめ・・・だったか・・・」

悔しそうな声を上げながら麻里香は気を失った。

そのうえ、可奈子も被弾して戦闘不能の状態だった。

「はあ・・・はあ・・・だいぶ魔力を使ったが、これで最後だ。」

また連射型の魔法を使用するための魔法陣を展開する。

そして、また魔力弾が男の周囲に生成され始める。

「ははは・・・今度こそ死にやがれ!! フェアニヒテン・トイフル!!」

可奈子たちが死を覚悟した瞬間、美しい歌声が響きわたる。

すると、可奈子たちの前に魔法の障壁が生成され、全魔力弾を止め切った。

「あら、桐谷先生じゃないですか!? 私ですよ、私! 2年の宇多田<sup>うただか</sup>奏<sup>なで</sup>ですよ!!」

宇多田奏。

身長170センチほどで、クリーム色の長髪をポニーテールにしている。

魔道学校2年の特殊魔法使用者だ。

彼女は歌を歌うことで魔法の障壁を作ったり、攻撃を行ったりする。その戦い方から「セイレーン」の異名を持つ。

「あ・・・奏ちゃん。もしかして、そっちの事件が片付いてわざわざ助けに？」

「まあ、そういうことだねー！んで、あの男をぶっ倒せばいいんですよね。」

そういつて振り向くと、男に向かって歌を歌い始める。

「あ？なんの真似だ？てめえもぶち抜くぞー！」  
銃を向けられてもなお、歌をやめない。

「死ねやー！！・・・なっ！？」  
魔力弾が発射されない。それどころか男は身動きさえ取れなくなっている。

「なんだこれ、体が動かない・・・だと？」

すると、奏は違う歌を歌い始める。

「う・・・なんだこれは？体が・・・うわあああああああ  
！！！」

なんと、男の体が爆発でもしたかのように四散し、骨一つ残さず消えた。

「くっつ・・・！ゲホッ・・・ゲホッ・・・」

「奏先輩！！！」

「あなたが・・・可奈子ちゃんね。」

「そうです。大丈夫ですか？それに、今の魔法は？」

「え．．．ええ．．．今は歌の力で対象の細胞を操る魔法なの．．  
．．使えば一瞬で敵をやつつけられるんだけど．．．喉と魔力の消  
費が半端じゃなくて．．．」

「あの、話の途中で悪いんだけど、そろそろ帰って休養取らないと  
みんなえらくやられたから．．．」

「桐谷先生も大丈夫ですか？しょうがないから．．．私がみんな転  
送しますね。なんでここに来たとかはあとで話しますんで．．．は  
あ、はあ。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2208z/>

---

国立魔道学校魔道犯罪対策科

2011年12月13日19時55分発行